

## 公民館の事業内容を問い直す



広島大学大学院教育学研究科教授 小池 源吾

戦後社会教育において中核的な役割を果たしてきたと自他ともに認める公民館であるが、この間、つねに順風満帆であったわけではない。たとえば都市化、過疎化の進行によって伝統的なコミュニティが崩壊すると、公民館はその存立の基盤が危機にさらされた。

1980年代の後半以降、高等教育を基軸に据えたビジョンのもとに生涯学習政策が矢継ぎ早に打ち出されると、公民館は、そのあおりを受けて、傍系に甘んじることを余儀なくされたかのように見える。また、ごく最近では、地方自治法が改正された。それにともなって、早晚導入されるであろう指定管理者制度は、公設公営を自明の理としてきた公民館のあり方そのものを根本から揺さぶろうとしている。

だが、どんなに時代や状況が変わろうとも、公民館は、社会教育施設としての役割を自棄することはないはずだ。社会教育施設としての役割といえ、なにはともあれ学習機会の提供が重要である。ところが主催事業に注目し、そこでの学習プログラムについて診断を試みると、何やら重大な問題が垣間見えてくるのである。

主催事業を企画する際、パソコンなどの操作やスポーツの技能上達を意図した場合、到達目標ごとに学習やトレーニングの内容と工程のほとんどは、あらかじめ決まっている。したがって学習プログラムを作成するにあた

っては、学習者が、それらを順次遺漏なく習得したり、体得できるように編成しさえすればよいことになる。立案者が学習プログラムづくりに頭を悩ませることは比較的少ない。

しかし、多くの場合、ジャンルあるいは主たる参加者が想定されているだけで、プログラムに何を盛り込むかは立案者の裁量にまかされている。こうなると立案者次第で、プログラムの出来不出来は大きく左右されることになる。よくいえば、立案者の腕の見せどころでもある。プログラムを診断しようとするれば、この種の事例を取り上げるのが好都合である。

まず最初に取り上げた事例①は、福岡市内の公民館で1987年に実施された「婦人教育学級」のうちの、ごく平均的なプログラムである。その特徴を列挙すると、生活上の課題を扱う学習で、全8回からなる。第1回から第3回あたりまでは、人間関係にまつわる問題を念頭に置いていたらしい様子が見ええる。しかし、それ以後の内容をみると、相互の関係は希薄で、何を拠にして学習の展開を図ろうとしているのか不明である。つまり、各回の学習は、バラバラで、連続性（シーケンス）に乏しい。

2つ目の事例②は、新潟県高田市におけるやはり「婦人学級」のプログラムである。このプログラムは、全部で5回の学習でもって構成され、毎回、2人の講師を招聘して講演

事例① 福岡市における「婦人学級」のプログラム（1987年）

ねらい：人間の生活課題も多様に問題を抱えている今日、主婦として、一人の女性として人間的に成長する喜びにつながるような学習を共につくりだす。

1	人間関係づくりを大切に	講演
2	家庭の中の女性 —その過去と現在—	講演
3	近所づきあいを考える —立場・うちの立場—	講演
4	くらしの中の人権問題 —女性が変われば社会が変わる—	講演
5	郷土の歴史	講演
6	婦人の体と心を考える —向老期の不安をのり越えて—	講演
7	婦人の生き方を考える —史跡を訪ねて—	見学
8	住みよい地域づくりと婦人の役割	講演

事例② 高田市における「婦人学級」のプログラム（1958年）

1	化学繊維の知識 婦人教育のありかた	講演
2	市政について 家庭裁判所のマドから見た世相	講演
3	新政府と農村経済 国連加入について	講演
4	報徳精神について グループ活動の実際について	講演
5	栄養の知識 県財政について	講演

を行うように企図されている。興味深いのは、県下の社会教育事業を調査した新潟県教育委員会社会教育課が、このプログラムの問題点として指摘した内容である。それによると、①学習内容の系統性、関連性の欠如、②知識、

情報の一方的注入、③大物講師、名士の名を借りた人集め、の3点について、早急に改善すべきことが勧告されている。1958年のことであるから、共同学習が一世を風靡<sup>び</sup>していた時代状況もうかがえる。だが、ここで注目す

事例③ 広島市近辺における「女性セミナー」のプログラム (1997年)

ねらい：家庭生活を創造的，合理的に営むことができるよう家計・衣食住の管理，家族の人間関係等の家庭の生活設計について学習する。また，急激な社会環境の変化による，日常生活に伴う環境破壊および心身の健康管理について学習する。

1	自己発見！ —あなた自分を知っていますか？—	話し合い
2	あなたが主役！ —自己の改革と自己表現—	講義
3	女性・妻・母の立場 —家庭での位置は？—	講義
4	家族の幸福追求！ —心豊かに生活するためには—	講義
5	脱！マンネリ —あなた生きがいを感じていますか—	話し合い
6	心身ともにリフレッシュ① —ストレスを上手に解消していますか？—	講義
7	心身ともにリフレッシュ② —ストレス解消に軽い運動を—	実技
8	ヘルシー食生活 —女性の栄養バランスを考えた食事—	実技
9	青い地球の幸せ —環境を守るのも生活の一環です—	講義
10	2000年に向かってホップ・ステップ・ジャンプ —発見！あなたの生き方・私の生き方—	話し合い

べきは，筆頭にあげられた問題点である。これを先の福岡市の事例と考えあわせてみるとよい。

一方は新潟県高田市，他方は福岡市の，縁もゆかりもない2都市のわずかばかりの事例を引き比べて，結論めいたことをいおうものなら，<sup>ひんしゅく</sup> 壘蹙を買うおそれがないわけではない。そこで，念のためにもう1つ，広島市近辺の町で1997年に実施された事例③「女性セミナー」のプログラムにも言及しておこう。全10回からなる各回の学習内容を通覧していただ

きたい。部分的には，相互の関連性に配慮していても，プログラム全体としての系統性や体系性に欠けることは一目瞭然である。

劣悪な事例ばかりを意図的に拾い出したわけではない。となれば，これらの事例から明らかなのは，次の2点である。少なくとも1950年代後半期に問題指摘がなされたにもかかわらず，それ以後も公民館における学習プログラムはしかるべき改善がみられぬまま今日に至ったこと，しかも地理的な広がりにかんがみて，<sup>りょうぜん</sup> 学習プログラムとしての体をなさ

ぬ事例は、けっして一部地域の特殊な現象ではなく、きわめて一般的な現象と考えるのが正鵠<sup>まがと</sup>を射ている。

いくらかでも現状を改善しようとすれば、原因の究明が欠かせない。

原義からすると、所期のねらいを効果的に達成するための道筋を示したものが学習プログラムである。登山にたとえるなら、ルートと必要な装備を示した地図もしくは備忘録のようなものである。むろん、ルートや装備は、めざす山がどこにあるのか、またその山が、手軽に登れる山か、危険をとまなう山かで、大きく異なる。だから、登頂しようとする山が未定であったり、不確定な状態のまま、登山に出かけるなどあり得ない相談である。ところが、公民館の主催事業では、まさにそうしたことが平然と行われているのだ。めざす山とは、到達目標であるから、当該事業でいうと、ねらいにあたる。もう少し厳密にねらいを定義するなら、学習活動をとおして学習者にもたらすことが予期される望ましい変容のことである。

かつて成人教育学者ノールズは、アメリカにおける成人教育プログラムを調査して、ねらいとしての条件を欠いた事例を3つに分類した<sup>(1)</sup>。その第一は、抽象的な文言、一般には美辞麗句を書き連ねたもの、第二は、学習内容を羅列したもの、第三は、講師がこれからやろうとする行為を記述したもの。いずれも、学習者に期待される変容は明示していないという点で、致命的な欠点をもつ。ちなみに、先述した学習プログラムの事例①は、ノールズが問題視した第一のタイプに、事例③は第二のタイプに該当している。ごった煮的な内容でも許容してしまう原因の1つは、ねらいの絞り込みが弱いからである。学習によってもたらされる変容の具体像を立案者自身

が描き切れていないことによる。もっといえば、学習プログラムに関する基礎理論が欠落しているせいである。

それでも、基礎理論は、学習プログラムを立案する際の道具でしかない。道具が立派であるにこしたことはないが、だからといってすぐれたプログラムができあがるわけではない。要は、道具を使いこなす当事者の腕である。関連性も系統性も乏しいプログラムが根絶されないでいるもう1つの原因は、どうやらこのあたりにありそうだ。とすれば、公民館職員にいま求められているのは、現実と向き合い、そこに所在する問題を的確に把握<sup>とら</sup>する力である。学習プログラムに命を吹き込むのは、問題意識だからである。次には、それを学習課題にまで仕立て上げる力が必要である。先達が「学習必要の自覚化」<sup>(2)</sup>と呼んだものが、それであった。オシエ・ソグテルことに腐心するより、住民とともに疑問や問題を探求する姿態が肝要である。

全国の公民館のいくつかでは、刮目すべき実践が真摯<sup>まこと</sup>に展開されていることは十分承知している。しかし、同時に、お粗末な学習プログラムが存在し、手つかずの状態にあることもまた事実なのである。生涯学習社会のなかでいま公民館に問われているのは、そうした現状に何らの問題を感じない無頓着、無神経さなのではないだろうか。これでは、戦後社会教育理念の体现者を自負してきた公民館の名譽を汚すことになるだろう。即刻、身辺をみまわし学習プログラムの自己点検にとりかかってみてはいかがだろうか。

(1) Knowles, Malcolm S., Modern Practice of Adult Education. Association Press, 1970.

(2) 宮原誠一「教育と社会」『宮原誠一教育論集』第1巻 国土社 1976年。